帝小発20－G011号

11月号（No.145）　2020年10月26日

帝京大学小学校だより

帝京大学小学校

変化を楽しむ

帝京大学小学校　校長　石井　卓之

台風や秋雨で体育発表会が延期となり、やっと10月18日（日）に実施することができました。多くの保護者の皆様にご参観いただき、ありがとうございました。例年通りとはいきませんが、子どもたちの教育活動の成果を垣間見ていただけたのではないでしょうか。練習中、上学年が下学年に教えるという場面がありました。この学び合いがとてもよかったとの感想が多くの教員からありました。協働の有効性を強く感じました。

私が子どもの頃、小学校では春の小運動会、秋の大運動会と年間2回実施されていました。参加種目は、徒競走、学年団体種目、ダンスの3種目だったと思います。ダンスは学年毎に演目が決められていて、ほぼ全てがフォークダンスでした。全体練習は学年全員の動きが完成するまで何回も繰り返えされ、身に付いたのは運動会に対する負のイメージだけでした。しかし、中学校では運動会ではなく陸上記録会でした。運営は生徒会が中心となり、各自が参加する種目も自分で選べるようになりました。全体練習はほとんどなく、エントリーした種目の練習を自分のペースで行うことができました。私はハードル走を選びました。短距離走では勝てない人にも、ハードリング技術を身に付ければタイムが縮まり、私の勝つチャンスがありそうだったからです。自分の目標が明確となると、あまり好きではなかった陸上にも前向きになることができました。小学校までのやらされ感ではなく、「本で調べる。上手な同じ学年の人から教えてもらう。部活の先輩に教えてもらう。」など自分の頭で考えて実践し、放課後練習もしていました。当日の結果を覚えていないということは、素晴らしいタイムではなかったのかもしれませんが、今でもハードリングは得意です。

1996 年の中央教育審議会の答申には不易（時代を超えて変わらない価値のあるもの）と流行（時代の変化とともに変えていく必要があるもの）という言葉がありましたが、時代とともに不易の中にも流行に転移するものもある気がします。特に、今回のコロナウイス感染症下では色々な意味でグローバル化を実感しました。また、学校のICT化もものすごいスピードで進み、公立学校が3年以上かかることがこの1年でできた感覚です。

世の中の変化に学校教育が追いついていないとの意見がありますが、私はある意味で同感です。学びの質も、単なる知識を機械的に覚えるのではなく、解決したい課題を自分で見つけ出して粘り強く解決を進めていくことや友達との話し合いの中から単なる妥協でなく納得解を創り上げていくことへと転換を図らなければなりません。

先日、ミネルバ大学の記事を目にしました。校舎をもたない大学で、学生は世界七か国の都市（サンフランシスコ、ソウル、ハイデラバード、ベルリン、ブエノスアイレス、ロンドン、台北）を回って実学を学んでいるそうです。受験者200万人、合格率約2％未満で※「THE世界大学ランキング　2021」でトップだったオックスフォード大学（英国）を辞退してまでも入学を決めた学生がいるなど、センセーショナルな内容でした。ミネルバ大学で重視している2つの思考力（クリティカル思考力、クリエイティブ思考力）と2つの能力（プレゼンテーション能力、対人コミュニケーション能力）は私が帝京大学小学校で伸ばしたい力、そのものでした。

世界は日々動いています。教育もその動向を見据えて動いていく必要があります。不易を大切にしながらも、世界標準の流行を日本らしく取り入れ教育を進めていく必要があります。

帝京大学小学校では、「自分流」を踏まえ、「キラッと光る個性」を発揮できる「一転突破の力」の育成を進めていきます。

※帝京大学は、501～600 位（国内大学では11位、私立総合大学では１位）